

# 鳥の劇場通信

鳥の劇場は、鳥取県鳥取市鹿野町の廃校になった小学校と幼稚園を劇場に変えて、2006年から演劇活動をしています。鳥の劇場という名前は、芸術団体の名前であり、場所の名前でもあります。この時代、日本、鳥取、鹿野町という状況の中で、演劇や劇場の可能性を見つめ、社会に対して我々のできる本質的な貢献は何かを考えながら、劇場での作品制作、上演、県外国外での上演、国際演劇祭の開催、教育活動、学校との連携などを行っています。演劇やアートの力への信頼、コミュニティーの新しい未来をつくりたいという思いでつながった国内外の多くの人たちとのネットワークが、我々の活動を支えています。2016年で活動開始から10周年を迎えます。

## 鳥の劇場 vol.11

### 鳥の劇場2015年度活動テーマ

# 戦後70年、設立9年目。 広める、深める。「私」、「今」をこえる、 想像・連帯の拠点として。



5月の公演「天使バビロンに來たる」にかかわった総メンバー。舞台装置前で撮影。  
※舞台装置は静岡県舞台芸術公園「椿円堂」内装に基づく

想像力と創造力の時代になった。2014年は第一次世界大戦開戦から100年、15年は太平洋戦争の敗戦から70年。戦争という巨大な災厄。けれど戦争の記憶は社会の幅広い連帯の源でもあった。富む人も貧しい人も、すべての人が戦争で苦しみ悲しんだ。痛み、貧しさを共有した。それが長い間社会を自然につないだ。現在はどうか。経済の成熟は社会や人間の成熟と同義ではないことを、思わせられない日はない。私たちの社会は、物や情報の豊かさの中に巨大なディスコミュニケーションや孤独を抱えている。過去からの声に耳を傾ける。想像力を駆使して耳と目と心をすます。人は、「今」そして「私」の限られた世界が、普遍的なものだと思いがち。その曇りを払って、世界の見方を広め深め、未来を開かなければならない。本年度も鳥の劇場では、子供も楽しめる作品から、テーマ性、社会性の強い作品まで幅広い上質な作品を提供する。鳥の劇場には、多くの外国の舞台芸術家が滞在する。単なる交流ではなく、戦争をテーマにした国際的共同作業も行う。障がいのある人の芝居づくりの支援も行う。教育のための学校現場との連携もさらに進め、教育の中で果たす舞台芸術の役割を社会的にアピールしていく。設立から9年、劇場が、出会いの場、共感の場、つながりの場、連帯の場であることを、我々は実践によって確認してきた。2016年は10周年を迎える。人をつなぐ多層的な網を編み直さねばならない現在。より多くの人に劇場を知ってもらう「広める」活動と、現在の社会状況の中で劇場の可能性を「深める」活動。この二つをバランスよく実施し、設立10周年に向けて劇場活動の一層の活性化を目指す。

「鳥の劇場2015年度プログラム」とその他の活動予定	
<b>2015年</b> 4月25日(土)・26日(日) ふじのくにごせき演劇祭2015 「天使バビロンに來たる」静岡公演 (静岡県舞台芸術公園・屋内ホール「椿円堂」) 5月2日(土)～6日(水・休) <創るプログラム>「天使バビロンに來たる」 5月30日(土)・31日(日)、6月6日(土)・7日(日) <創るプログラム> 大人も楽しめる子どもための上演 やぎの二つの物語 「おおかみと七ひきのこぎや」/「三びきのやぎのがらがらどん」 7月5日(日)～2016年3月25日(金) <いっしょにやるプログラム>「小鳥の学校」	<b>2016年</b> 1月～2月 <考えるプログラム> 鳥取県内巡回上演「白雪姫」 1月16日(土)・17日(日) 東部公演(鳥取市文化ホール) 2月13日(土)・14日(日) 中部公演(カウベルホール/琴浦町) 2月27日(土)・28日(日) 西部公演(米子市流江文化センター「さめホール」) 3月13日(日) 西大寺子ども劇場30周年記念特別公演 「すてきな三にんぐみ」岡山公演(百花プラザ多目的ホール/岡山市西大寺) 3月26日(土)・27日(日) <いっしょにやるプログラム> 「小鳥の学校」発表公演

### 今秋、劇場施設が改修されます

築40年近い古い体育館が、鳥の劇場の主劇場です。舞台は間口12m奥行11m。客席は約200席、切妻の天井は低いところ8m、最高部で12m。空間としては非常に良いのですが、いくつか問題があります。  
1 暑さと寒さ。何しろ体育館なので、夏暑く、冬は寒い。変電設備と空調を自前で導入しましたが、壁のすき間も多く、室温のコントロールがなかなかうまくいきません。  
2 雨漏り。トタン張りの天井が老朽化していて、そこそこ雨が落ちます。幸い本番中に客席や舞台上にポツンポツンということは起きていません。が、稽古中には、割と頻繁です。  
3 雨音。パーッと音がし始めたらいへんです。ひどくなると俳優の言葉どころか、何も聞こえなくなります。本番を前に雨が降りそうな空模様だと、祈るような気持ちで、天を仰ぎます。俳優にも「今日は降りそうだから、もしもたら、一段しかり声出して」と伝えます。冬にアラレなんか降られたらもう最悪です。  
4 耐震強度の不足。一つの目安であるIs値が不足しています。大きな地震が来たら危険なようです。私たちの施設は、使われなくなった小学校と幼稚園です。所有者は鳥取市です。2004年の鳥取市と上鹿野町の合併の際には、取り壊される方針でした。その状況下で、我々が借り受けて活動を開始しました。その中で、旧来の設備の課題が浮上し、どう対応できるかについて各方面の方々のご理解のもと、ここ数年、さまざまに協議を重ねてきました。

そしてようやく、自治体の費用負担により、全面的な改修が行われることになりました。耐震補強、屋根と外壁の改修が実施されます。工事の詳細は、これからじっくりと詰めていきます。この決定の特筆すべき点は、我々が鹿野で占有の施設を持ちながら演劇活動をするこの社会的意味が、鳥取県、鳥取市からしっかりと評価されたという点です。みんながスポーツで使う体育館が古くなった時、それを直すというはよくある当たり前のこと。一方、我々の劇場の体育館は、基本的に使っているのは鳥の劇場だけです。見学などはいつでもできます。予定さえ合えば地域の方にも使ってもらっていますが、基本は鳥の劇場の占有空間です。その場所が公費による改修の対象になるというのは、我々が鳥取県鳥取市鹿野町に存在し、演劇活動をし、公演や演劇祭を行い、国内外でもさまざまな活動している。そのことについて、公的な意味があるのだということも多くの方が認めてくれたということだと思っています。ご理解、ご支援いただいたみなさんに深く感謝申し上げます。工事は秋の演劇祭の後から開始し、来春には終わる予定です。みなさんご期待ください。



現在の外観

### サポーター寄付のお願い

## 鳥の劇場2015年度サポーター募集

みなさんのご支援のおかげで、活動開始から9周年を迎えます。どうせ2、3年で消えるに決まっています。活動開始当初、多くの人が考えていたと最近知りました。私たちは全然そんな風には思っていなかったのですが、今になって客観的に状況を振り返ると、そのように思われても無理はなからうと思います。

しかし、多くの人がそう思いながらも、むしろそう思ったからこそ、そうならないようにと応援してくださいました。おかげで、来年は10周年です。この秋には、劇場施設の改修もされます。

寄付が税額控除の対象となる認定NPOとなるための作業も、忙しさのために停滞していましたが、進めています。認定NPOと同様の税額控除となる寄付の受け方も用意しております。

ご寄付は、施設の充実や日々の活動に充てていきます。お金がなくてもがんばりますが、お金がないとできないがんばりもあります。私たちが始めて、みなさんが育ててくださったこの活動に、みなさんの方で栄養を与えてください。

我々の目指すのは、鳥の劇場の活動を、地域・世界とのつながりの中でもっと盛り上げること。そしてもう一つ、地域の中での芸術活動の社会的意味をより多くの方に共有してもらい、なんらかの形で安定的な制度として次世代に渡していくこと。この二つです。日々応援して下さるみなさんに深く感謝しつつ、毎年のお願いを申し上げます次第です。

鳥の劇場芸術監督 中島諒人



～2014年度活動報告会～  
2015年6月13日(土)14～16時  
県内外から31名のサポーターの方  
がご出席くださり、耐震改修や活動  
10周年に向けて直接ご意見をいた  
だきました。

### 4月から新メンバーが 加わりました!



鳥取の  
美味しいごはんが  
大好きです。  
よろしくお願ひします。  
辻口実里(制作・大阪府出身)

鳥取に来る前は、香川で主に  
コンテンポラリーダンスを勉強していた。  
身体と言葉でたくさん遊んで、  
自分なりの演技を  
見つけて行こうと思います。  
鳥巻睦美(俳優・高知県出身)

### しかの、私のおすすめ



#### ①鹿野城跡のお堀

言わずと知れた桜の名所。500本ものソメイヨシノの花がいっせいに咲く景色はまさに美しいの一言。夜はライトアップされた桜が水面に映り、怪しいくらいに絶景です。白鳥と鯉も住んでいます。

#### ②喫茶アイガ

鹿野住民の憩いの喫茶店。美味しくて量もたっぷりの定食は一度食べたらクセになる。若マスターは新作メニューづくりに意欲的。パープル色の外観が目印です。

紹介:村上里美(俳優)

### 鳥の劇場へのアクセス

鳥取県鳥取市鹿野町鹿野1812-1 電話:0857-84-3268

■JRを使って  
劇場の最寄り駅はJR浜村駅です。※公演日は浜村駅と劇場の間を、車で送迎いたします(無料、要予約)。  
□浜村駅まで ・鳥取駅から、山陰本線、米子方面行きで30分  
・倉吉駅から、山陰本線、鳥取方面行きで25分  
・米子駅から、山陰本線、鳥取方面行きで1時間40分  
□浜村駅から ・車で15分

■車をを使って  
公演日は会場近くに案内看板を設置します。  
・鳥取自動車道、鳥取西ICから約30分  
・鳥取空港から約30分  
・鳥取市中心部から約40分  
・倉吉市中心部から約50分  
・米子市中心部から約1時間30分

※ご宿泊について  
□山新苑 0857-84-2211 www.sanshen.jp  
□お宿夢彦 0857-84-2411 www.yumehiko.co.jp  
□熊鷹庵 0857-82-0531 www.ryofuan.com



東京・大阪・神戸・京都・広島・福岡の各都市と鳥取の間で高速バスが運行しています。

<b>□東京</b> 飛行機 約1時間10分(羽田空港-鳥取空港) JR 約3時間(東京駅-鳥取駅)	<b>□京都</b> JR 約3時間(京都駅-鳥取駅) 車 約3時間(中国自動車道-鳥取自動車道)	<b>□大阪</b> JR 約2時間30分(新大阪駅-鳥取駅) 車 約2時間30分(名神高速道路-中国自動車道-鳥取自動車道)	<b>□岡山</b> JR 約2時間(岡山駅-鳥取駅)
--	---	---	--------------------------------

### 鳥の劇場

2006年1月、演出家・中島諒人を中心に設立。鳥取県鳥取市鹿野町の廃校になった幼稚園・小学校を劇場施設へ手作りリノベーション。収容数200人の「劇場」と80人の「スタジオ」をもつ。劇団の運営する劇場として、「創る」・「拓く」・「いっしょにやる」・「試みる」・「考える」の5本柱で年間プログラムを構成。現代劇の創作・上演と併せて、ワークショップ、優れた作品の招聘、レクチャーなどを実施する。  
主な作品は、「老貴婦人の訪問」(デュレマット)、「かもめ」(チャーホフ)、「剣を鍛える話」(魯迅)、「誤解」(カミュ)、「熊野」・「葵上」(三島由紀夫)、「料理昇降機」(ピントー)、「白雪姫」(グリム)、「天使バビロンに來たる」(デュレマット)など。  
2008年から地域や行政との協働による演劇祭「鳥の演劇祭」を実施。国際交流を進めており、韓国、中国、ルーマニア、イギリス、イタリア、フィンランド、フランス、ドイツ、ハンガリー、トルコ、アメリカなどのアーティストが活動。日中韓三国の演劇祭「BeSeTo演劇祭」も開催。舞台芸術家のための創作の拠点として、全国、海外に開かれた場となることを目指す。同時に、演劇・劇場にしかできないやり方で地域振興、教育分野への貢献のあり方を模索している。  
2011年度国際交流基金地球市民賞受賞。

芸術監督:中島諒人(なかしまこと)  
演出家。鳥取県鳥取市出身。1990年東京大学法学部卒業。大学在学中より演劇活動を開始、卒業後東京を拠点に劇団を主宰。2003年利賀演劇祭で最優秀演出家賞受賞。2004年から1年半、静岡県舞台芸術センターに所属。2006年より鳥取に劇団の拠点を移し、「鳥の劇場」をスタート。二千年以上の歴史を持つ文化装置＝演劇の本来の力を過じて、一般社会の中に演劇の居場所をつくり、その素朴らしさを必要に広く認識されることを目指す。芸術的価値の追求と普及活動を両輪に、地域振興や教育分野にもかわる。公益財団法人舞台芸術財団演劇人会議理事 鳥取大学非常勤講師 BeSeTo演劇祭国際委員 鳥取県教育委員 特定非営利活動法人取手アートプロジェクトオフィス理事 特定非営利活動法人アールNPOリンク理事 平成21年度芸術選奨文部科学大臣新人賞受賞  
劇団メンバー  
青藤頼陽・中川玲奈・齋藤啓・赤羽三郎・村上里美・葛岡由衣・武中淳彦・高橋等・中垣直久・中本絵美・生田正・安田実耶・中島佳子・辻口実里・鳥巻睦美

劇場の見学は、休日・公演日以外はいつでも可能です。休日が不定期ですので、お越しになる前にお電話でご確認ください。また、稽古見学希望の方は、事前にご相談ください。  
特定非営利活動法人鳥の劇場 ウェブサイト www.birdtheatre.org 電子メール info@birdtheatre.org 〒689-0405 鳥取県鳥取市鹿野町鹿野1812-1 電話・ファックス 0857-84-3268

こんなことをやりました

敗戦から70年 40年前の現代戯曲から70年の屈折と2015年の日本を考える

## 『戦争で死ねなかったお父さんのために』

2015年3月13日(金)～15日(日)・20日(金)～22日(日)  
作:つかこうへい 演出:中島諒人

### 上演を振り返って

昭和50年の東京のある大学の演劇部での読み合わせという形で上演した。東京のサブカルチャー好きの若者の集まる小さな劇場で、つかこうへいの世界は生まれ、成長した。そこは、それまでこの国に存在することなかった祝祭的特殊空間。良識のある日常の中では決して言ってはいけないことが大声で語られ、大きな笑いをもって受け入れられた。当時の状況を活かす上げがらせるために、舞台上に5.4m角の舞台を組み、その空間を部屋とし、演じる部員と笑いながらそれを観る他の部員という形で芝居を示した。

語られるのは、戦場を恋愛や冒険の場と捉えるいわば不謹慎な言葉。最後は、今はない満州に果たされなかった夢を託す人々を描き、「天皇陛下万歳」の言葉で幕を閉じる。戦争をバカにしてるのか、あるいは右翼かと勘違いされてしまうようなセリフ。唐突に始まる劇中劇もあり、乱暴な飛躍や断絶もある独特の展開。さらにそれを、40年前の若者の風景として眺めることを求める演出的な提示。叙切り型の言葉の飛び交うドラマ喜劇のような劇空間だが、実はかなり知的な読解、多面的な思考を必要とする舞台となった。そもそもこのテキストを取り上げたのは、「戦後」という時代の大きな転回点を捉えているという直感があったから。太平洋戦争という巨大な経験を、社会が全体としてどのように評価し、整理し、それに基づき以後の社会をどのように築いていくか。その大きな揺れが70年安保まで続いた。が、その終焉によって、多くの問いかけや問題意識は、宙ぶらりんのまま断ち切れ、経済の繁栄によって多くの社会的矛盾をなかったように塗りつぶし、アメリカのしもべとして存在することを決めた時代。そのタイピングでの作品は書かれている。

物語は大きくは三パートに分けられる。戦時中に召集令状が来なかったばかりに不幸な戦中、戦後を過ごした男が、30年遅れで届いた赤紙に歓喜し、見送りに来た元兵士と戦場への夢やロマンを語る。これが第一パート。戦後世代の若者から父親世代への悪意を込めた冷たい視線が強烈に投げかけられる。「苦しかった、つらかった、お前たちにはわからない」と父たちが戦場で、実は彼らは目を輝かせてやりたい放題の充実した日々を送っていたんじゃないか。困難と言っても、それは受験戦争のそれと同レベルではないのか。父親世代の特権的な記憶が、若者の日常レベルに徹底的に引きずり下ろされ、笑いの対象となる。第一パートの最後、出征しようとするお父さんは、自分が出征することで、アメリカに屈従させられた戦後を書き換えてみせると誓い立つ。

第二パートでは、「お父さん」の息子、寒太郎が進駐軍の米兵の姿で現れ、サディスティックに日本人を痛めつける。圧倒的な米兵の物量、腕力の前では、誰もなす術なく、逃げるかヘラヘラと媚びるしかない。

最後のパート。寒太郎は、お父さんたち出征兵士の先導役となる。戦後民主主義に毒された彼らを厳しく指導、監督しながら、将校である寒太郎は亡き者を悼み、幻の満州への思いを募らせる。若者と戦中世代という対立軸で構成されてきた芝居だったが、屈折を強いられた居場所のない孤獨な者たちという網が登場者全員にかぶせられ、その網は客席、広くは社会全体にも届くつづ芝居は終わる。

つかは、悪意を込めた辛辣なギャグが有名。しかし、それだけではない。敗北した人間、決して勝てない人間が、一瞬でも輝くために、見栄を張り大言壮語し、妄想を語る。救われることのない敗者のどうしようもなく孤独で切実な、居場所を求めぬあがきを描こうとした。演出の作業を通じて、作家のクールな真摯さに確かに出会えたと感じた。

戦後30年という時間を批判的に浮かび上がらせることが作家の目論見だった。だが、上に書いたような劇中劇という演出的企みもかませたことで、昭和50年から後、現在に至る40年という時間の流れを具体的な手触りとともに観客と共有できた。日本の現代戯曲の上演によってしか得られない手応えで大きな収穫だった。もう一つ。現在の右傾化する政状況の中で、この作品が、強反戦のメッセージを発することに驚いた。反戦とか戦争反対なんて一言も言わず、むしろ言葉の上では逆のことがばかり言っているのに、である。

中島諒人(演出家)



3月21日(土)、22日(日)には、演劇批評家の菅孝行さんをお招きし、アフタートークを行いました。

### 節目の年のつかこうへい―鳥の劇場公演に寄せて

3月21日、22日の両日、鳥の劇場で、つかこうへい作・中島諒人演出の「戦争で死ねなかったお父さんのために」を観た。戦争中、郵便物が盗難に遭い、戦後30年経って発見された「赤紙」(召集令状)が一人の男の下に届き、郵便局長と警察署長が、この「お父さん」を、幻の満州に向けて送り出すという荒唐無稽な物語である。30年後に「出征」する「お父さん」は、時の止まった亡霊のようでもあり、経済侵略の企業戦士のようでもあり、ツアーコンダクターに引率された妓生観光の客のようにもみえた。

この舞台は、1975年当時の大学の学生劇団の稽古風景という枠組みで演出されていた。登場人物と演技手を二重化して見せることによって、戯曲の世界への距離感が出て批評的・複眼的な舞台に仕上がっていた。

私が鳥取まで出かけて行ったのは、終演後、演出家とトークをするようにという劇団のオファーがあったからである。二日とも、かなりの観客が残っていた。演出家は主に、この戯曲・演出の視点について語った。私はまず、若い頃のつかこうへいという作家がわたしたちに見えていたか、について話した。

「初級革命講座 飛龍伝」は、三里塚闘争の行動隊長と機動隊の隊長の<友情物語>である。この挿噺は、学生や農民の闘争にシンパシーを抱いていた人間には許容しがたいものだった。「熱海殺人事件」は、貧しく愚鈍で哀れな青年を、「立派な」殺人者として絞首台に送ることに無二の快感を覚える刑事の物語で、この刑事が、60年代演劇、通称アングラ第一世代を代表する演出家の姿と二重焼きにされた。これも、新劇を仮想敵に新しい演劇を目指すことに価値を見出している者には不快この上ないものだった。

今では周知のことが、つかこうへいは民族者を金峰雄という在日韓国人である。しかし、そのことをつかはまだカムアウトしてなかった。つかこうへいの全体像を在日という視点にばかり特化して解釈するのは誤りだが、この二つの戯曲の設定に関する限り、<在日の見た日本人>という構図で読み解くと見事に納得がゆく。「飛龍伝」(の初稿)からは<左翼と機動隊の対決など、一つ穴の貉の日本人が乳搾り合っているだけではないか>というつかの見立てが伝わってくる。また、「熱海殺人事件」からはこのデカ、つまりアングラ演劇のリーダーは、現実の貧しい若者の無残な運命を踏みにじる「功名」に陥れたナルシストではないか>というメッセージが読み取れた。

だが、本人が黙っているのに道義上元々の確明かしなどできない。どうしたらいいものか、という批評家の当惑は、断筆後、カムアウトして復讐した時まで続いた。

トークで話題になったもう一つのテーマは、つかが醸し出すグロテスクなく笑い>であった。これについてはこんな話をした。

つかは、どれもど暗鬱なテーマを扱うときも、舞台上にトン笑いを巻き起こした。アングラ第一世代の晦澁でおどろおどろしく見える「濃い」舞台上引き気味だった。団塊世代より少し若い観客は、こぞってつかこうへいの芝居に走った。そういう意味では、つかこうへいはアングラ殺しの演出家である。だがつか自身、笑ってくれた観客に手ひどく裏切られたように私には思える。つかは毒入りの笑いを振りまいているのに、観客は毒に当たらないで、ただゲラゲラ騒いで、舞台を消費していたのである。アングラ第一世代の客を奪った紀伊国屋劇場やVAN99を超演員にしたつかこうへいは、間の抜けた客に悪意をバクバク食われてしまったに過ぎない。人気の絶頂で断筆したのは、その失



### お客さまの感想

#### ～アンケートより(一部抜粋)～

○昔の若者の話が自身の若い頃の話であった、自分の体験・感覚と芝居とがぴったりきたりする感覚がありました。(60代男性)

○亡くなった父のことを思い出しながら観た。父は予科練で終戦を迎えた。七つ鉤の正装の写真を自撮りして、予科練の同窓会を楽しみながら、船米かぶれで、真っ赤なじゅうたんの洋間で、洋酒を飲み、ユーンパイをふかしていた。銃撃を木の陰でさけた話、鉄砲の玉の音が間近では違うという話しながら、米軍には全く怒みを持っていなかったよ。でた。(40代女性)

○アフタートークの「何かが伝われば」に救われた気がします。戦争体験者から第3世代ですが、生の体験が傳れる中、「何か」は伝わったので安心した気がします。(10代男性)

○戦後ベビーブーム生まれです。ここに来てつかこうへいと同じ年生まれと知りました。最近なかいにおいがありますが、平相でありたいと思います。同年代を生きたものとして共感しながら楽しみながら見ました。(60代女性)

○とっても楽しめました!コメディ要素が多くて入り込みやすかったです。つかこうへい、おもしろいですね!(20代女性)

○75年の笑い得た戦争体験の回想が、今は笑えないリアリティのある恐怖さになって迫ってきた。(70代男性)

○舞台上で演技をしている学生たちが笑っているけど、観客の自分たちは笑うに笑えないという場面が印象的でした。(20代男性)



菅孝行さん

敗に気づいたため、あるいは気づいたのに、どうすることもできないことへの自己嫌悪からだったのではあるまいか。

断筆から復讐した後、つかこうへいは、作家としての人気は衰えなかったが、演劇人としては不遇だった。野田秀樹が牽引する新しい笑いの演劇の時代、つかこうへいブームは限らず、彼の演劇上の終の棲家は北区のつかこうへい劇団だった。地味な活動だったが、この時期のつかこうへいに早くからもと関心を払うべきだったと思う。

遅れ馳せにそう思ったのは、つかの死後、劇団解散記念公演で「亮春捜査官」を見たからだ。この戯曲は「熱海殺人事件」の度重なる改作の到達点である。つかは変貌していた。「亮春捜査官」とは亮春捜査の捜査官ではなく、なんと亮春婦の捜査官のことだ。主人公は当然女性である。彼女が担当した事件の、悲しい強姦殺人犯と被害者女性とは同郷で、明示的に九州の在日最貧層として描かれていた。心なしか、捜査し、犯人を送検する亮春捜査官も犯人や被害者と<同郷>に見えた。

そういう目で「戦争で死ねなかったお父さんのために」を見ると、別の世界が開けてくる。戦時下の日本で、兵役検査に合格したのに召集令状が来なかった男子、というのは実は郵便物の盗難の結果ではなく、創氏改名の折に、戸籍に記載漏れになった植民地の住民という含みがあるかもしれないのだ。つかこうへいは、もうこのときから、おバカな日本人の「お父さん」を啜っただけでなく、30年たってもなお、幻の満州にでかけていこうとする自分や自分の同僚の「お父さん」も笑っていたことになる。

敗戦後70年、日本人が享受した「平和と民主主義」が、何を犠牲にした対価だったのかを顧みないのは恥ずかしいことだ、と私は思っている。もし本当に日本に基地が要るのなら「本土」に移せ。沖縄の「ちゅう海」はもう壊すなと思う。債務は沖縄にだけあるのではない。今こそ、つかこうへいが燃やし続けてきた悪意の意味を、日本人は受けとめるべきである。そんな心積りから、理解されないかもしれないことを覚悟で、その日はややこしい話ばかり重ねてしまった。

菅孝行(演劇批評家)



四万十川国際音楽祭2014

## 音楽劇『セロ弾きのゴーシュ』高知公演

2015年2月15日(日) 会場:ヨンデンプラザ中村(高知県四万十市)  
作:宮沢賢治／構成・演出:中島諒人／作曲:新倉 健／演奏:須々木竜紀(チェロ)、渡邊芳恵(ピアノ)

宮沢賢治の童話の言葉に、作曲家の新倉健さんが曲をつけた音楽劇。チェロとピアノの生演奏が、物語に新しい別の言葉を加えます。その中で俳優は、地の文を語る者、セリフを語る者、動く者とに分かれて演じます。語り手と動き手のそれぞれが考える登場人物像やイメージがぶつかり混ざり合うことで、お芝居として新しい発見が多くありました。そして、それが音楽とも響き合い、言葉の世界だけにとどまらない物語の広がりを提示できました。

2014年に初演し、再演を重ねる度に発展し、好評を得ている作品です。今回、高知県四万十市の国際音楽祭で上演する機会をいただき、多くの方々足を運んでくださいました。鳥の劇場に興味をもってもらうのにもびつたりの公演となりました。



## 映画上映『新しき民』

2015年2月5(木)～7日(土)  
脚本・監督:山崎樹一郎／主演:中垣直久

俳優・中垣直久が主演をつとめる映画の上映を行いました。鳥の劇場の公演を観た山崎監督からの出演依頼がきっかけで、撮影初日からちょうど1年目に鳥の劇場での上映となりました。映画は、1726年に今の岡山県真庭市で実際に起こった山中一揆をモチーフにえがかれた時代劇。農民が政府に抗い戦うとした中で、村も友も妻も子どもも捨て一人逃げた男が主人公。一見、箭の通らない男の逃げっぶりですが、逆にそれを貫き通す姿には芯の強さも感じさせます。スクリーンから伝わる雪山の冷たさも、主人公の心情を際立たせます。不思議と新しい人間像を見た感覚で、白黒画面の時代劇ですが、とても新しいものを感じました。

2015年10月から東京、大阪、名古屋、神戸にて劇場公開が決定しています。

また、今年7月9日～19日にアメリカ・ニューヨークで開催される北米最大の日本映画祭「JAPAN CUTS 2015」へ正式出品されることも決定しています。

「新しき民」ウェブサイト <http://ikkino.jp>

左:中垣直久 右:山崎樹一郎さん

## 韓国の劇団ティダとの作品づくりの打ち合わせのため韓国へ

2015年1月13日(火)～18日(日)

劇団ティダは、山深い農村にある廃校を自分たちのアートスペース「Tutbat」にリノベーションし、拠点として活動している韓国の劇団です。鳥の劇場とティダの交流は、2010年開催の「鳥の演劇祭3」での上演がきっかけとなってスタートしました。その後、ティダ主催「Tutbat演劇祭」で鳥の劇場の「白雪姫」上演、ティダの俳優の鳥の劇場への客演、合同での小作品製作・発表などを通じて、関係を深めてきました。

現在は2016年度の上演を目指し、「戦争」をテーマとした共同の作品づくりをすすめています。そのプロジェクトのキックオフとして、鳥の劇場メンバー数名が「Tutbat」を訪問しました。潜在はレクリエーションからスタート、「Tutbat」のある華川郡の名物となっている「氷サッカー」を楽しむ、親睦を深めました。その後は、自分たちの祖父母、親世代の体験談や歴史認識などを元に、「戦争」についての意見交換を実施。日程の最後には、韓国の独立運動について展示されている「独立記念館」を見学しました。どんな作品ができるのか、まったく未知数ですが、面白い作品が生まれる気配を感じることができた滞在でした。



## アウトリーチ活動もしています

2015年1月～3月

県内外の幼稚園・保育園や学校へ出かけて行って、短い作品の上演や、大人を対象にした演劇ワークショップを行いました。

ワークショップでは、ゲームを行ったり、絵本の中のシーンを演じたりします。みんな一つのことを行う集中力、相手に伝えるためのエネルギーや、他者を感じる想像力など、多くのことが求められます。演劇をツールとして真剣に遊びながら、社会で生きていく上で必要とされる、これらの力を得ていかに見つめ直します。いわゆる「教育」と演劇のかかわり方について、さまざまな模索を続けています。

最近行った外部での小作品上演・ワークショップ  
■NPO法人いしゆ鹿野まちづくり協議会主催の演劇ワークショップ(大阪国際大学生を対象に)  
■鳥取第四幼稚園(鳥取市)にて「アナンと5」上演  
■鳥取県教育センター主催の演劇ワークショップ(採用5年目の教員の方を対象に)  
■おまこ保育園(境港市)にて「どろぼうごっこ」上演  
■美保学園(米子市)にて演劇ワークショップ  
■四万十市立中村南小学校(高知県四万十市)にて演劇ワークショップ  
■四万十川国際音楽祭実行委員会主催の演劇ワークショップ(四万十市内の中高生希望者を対象に)



## 小鳥の学校発表公演『マクベス』

2015年3月28日(土)・29日(日)  
原作:W.シェイクスピア／構成・演出:小鳥の学校受講生と中島諒人／出演:小鳥の学校受講生

考える子ども、行動する子どもを目指す創造的な学びの場として、5回目の開催となった「小鳥の学校」。さまざまな分野の講師の方から学び、最後は恒例の演劇の発表公演で卒業となります。今年度は、鳥取県内の小5から中3までの子どもたち15名が参加しました。発表公演で子ども向けに書かれていない作品を扱うのは、今回が初めて。権力や名誉への欲望に振り回される人間を描いた「マクベス」は、子どもたちにとっては難しいテーマだったかもしれませんが、短い準備期間にもかかわらず、ものすごい集中力とエネルギーでつくり上げられました。演技だけでなく、小道具や衣裳、音楽づくりにかかわり、最後には子どもたちだけで新しい「結末」を考え、とても魅力的な「マクベス」となりました。

子どもたちの真剣に取り組む姿は、日常で大人が忘れてしまいがちな心を呼び起こし、その素直な目は、大人の暖かい心を突き刺します。いっしょに過ごした私たちも多くのことを感じました。子どもたちの未来のために劇場にできると。真摯に向き合い、考え続けなければならない「課題」です。

2014年度「小鳥の学校」実施授業・講師の方々

- 小作品「かくのむくべい」をつくる:二口大(俳優)
- 科学の学び―身近な不思議を検証:中村栄三(科学者)
- 国語の学び―詩をテーマに:浜本純逸(国語教育学者)
- 映画をつくらう:山崎樹一郎(映画監督)
- 経済の学び―働くことと幸せの関係:山田修平(鳥取短期大学学長)
- デザインの学び:笠置秀紀(デザイナー)
- リコーダーアンサンブル:武中淳彦(作曲家)
- 演劇をつくるための基本を知らう、「マクベス」をつくらう:中島諒人(演出家)



第20回BeSeTo演劇祭の日中韓共同製作のために、鳥の劇場にお越しいただいた中国の俳優、王衛国(ワン・ウェイグォ)さんが鳥取の思い出をエッセイに書いてくださいました。一部抜粋してご紹介します。

### 日本の鹿野町で感じ取った現代劇芸術

2013年秋、私は中国劇協から指名され、毎年一回開催される日中韓三国の演劇文化交流に参加した。今回の訪問で私が協力、交流することになる団体は、日本の鳥取市の私立の劇団、名前を「鳥の劇場」という。交流する演目は、米国の著名な劇作家であるアーサー・ミラーの作品「セールスマンの死」。日中韓三国の役者がそれぞれ主役を演ずる。

鳥取から30分車を走らせ、私は鹿野町にたどり着いた。緊張する仕事が始まった。私は創作を3つの段階に分けた。最初はすべての戯曲の台詞を覚える。次は詳細に溶接するかのようにコミュニケーションする。最後は自由に即興的に表現する。

第二段階-コミュニケーションの段階は最も困難な期間である。各自は自国の言葉を使うので、コミュニケーションの上ではまるで「鶏が鴨に話しかける」ごとく言葉が通じない。相手の演ずる意図をしかりと記憶するとともに、コミュニケーションの溶接点を固定し、演目が進行する中で流れを切断したり意味なく停滞したりすることがないようにする。

第三段階は、まさに私が大いに技を発展させる時間となった。私は即興的に生ずる動作、行為をとても大切にするとともに、有機的にふるいにかけ蓄えることを実行している。このことは役柄に豊富な表現力を持たせ、相手に想像する空間を与える。ぎこちないコミュニケーションがにわかに活発になりだし、日本の演劇のきんちんとした表現慣習に新しい息吹を加え、喜怒哀楽をきわめつものにした。

東京での二回公演は大成功となり、ただちに2014年中国で開催される日中韓文化交流プロジェクトの一つとなった。

公演終了後、日本の民衆はこう私に聞いてきた。「あなたは本当に日本語がわかるのですねなぜならあなたの顔と目を見れば、あなたは明らかに日本語をわかっています」。このとき私は悟った。人類の情感は共通するものだそして演劇は人類の最も共通して理解できる言葉の形式であり、人々が理解を増進させ、心を込めてお互いを感じ取れば、「一つうまくいけば万事すらすらと運ぶ」ことも可能なのだ。

今回の文化交流は、私にとってとても得るところが多く、異なる言葉と一緒に仕事をを経験を得るのみならず、日韓の演劇に従事する人たちの中国の役者に対する真摯な友情と演劇事業に対する熱愛を感じ取った。

私は自ら誇って言える。私は中国劇協が与えてくれた任務を円満に完成したと。

2014年7月15日 中国国家現代劇院 王衛国(翻訳:青戸直哉)